

# 子どもの規範意識と規範行動の実態に関する研究

—— 影響を及ぼす要因としての学校と地域の連携に着目して ——

芝山明義\*, 岩永定\*\*, 柏木智子\*\*\*,  
藤岡恭子\*\*\*\*, 橋本洋治\*\*\*\*\*

(キーワード: 規範意識, 規範行動, 学校と地域の連携)

## 1. はじめに—本研究の目的—

本研究の目的は、子どもの自己肯定意識と規範意識の実態を、それらに影響を及ぼす要因とともに明らかにすることである。現在、子どもたちの抱える多様な問題状況の中で、子どもの内面にかかわるものとして、自己肯定意識と規範意識の低下を課題として指摘できる。このうち、本研究では主に規範意識について検討する。なお、子どもの自己肯定意識に関しては、別に検討する。

子どもたちの規範意識の低下は、学校における「学級崩壊」やいじめ、「非行」や暴力的行為が問題視される中で、これらの行動との関連で取り上げられている問題である。ただし、子どもの規範意識の内容については、論者によってその捉え方が多様である。ここでは、社会に対する態度や考え方という大きな枠組みで捉えておくこととする。

子どもたちの規範意識について、その低下とされる問題状況への対応策は手探りの状態にある。子どもの規範意識については、心理学や教育学の分野で長年にわたる相当の研究蓄積が見られる。それでもなお解決策が模索されているのは、子どもたちの内面を的確に把握し、個々の事例に対応することが困難であるためと考えられる。ただし、心理学の分野では、その特性として子どもの内面を個人内要素として捉える傾向が強く、生じた問題を子どもの個人的要因に還元させる場合が多くあった。これに対して、教育社会学等の分野から、個の属する集団や周囲の影響を踏まえて子どもの内面を捉えるべきという見解が提示されつつある。そこでは、個の属する社会的文化的文脈に沿いながら子どもの内面について捉えなければ、社会的存在である子どもの内面を的確に把握できないことが課題とされている。しかしながら、子どもの属する集団や社会的背景と子どもの内面との関連を調べた研究は多くない。その中では、学級内での仲間関係や規律に関する調査研究はなされているが(中谷 2007, 河村 2007)、学校全体あるいは学校外の活動を視野に含めた調査研究はほとんど見あたらない。

以上のことから、本研究ではまず子どもの規範意識についての全般的な特徴とその内的構成を明らかにし、それらに影響を及ぼす要因を子どもの所属集団や社会的背景から検討する。具体的には、規範意識を規範の意識的側面(狭義の規範意識)と実際の行動的側面(規範行動)とに分け、子どもの規範意識、規範行動について、それぞれに影響を及ぼす要因として、校種、性別、部活動・通塾・習い事の有無、保護者や住民との触れ合い、学校外での体験活動の内容、を想定して、とくに学校と地域との連携の影響について検討する。

## 2. 研究の方法

本研究では、学校運営協議会を設置している小・中学校および学校運営協議会未設置の小・中学校それぞれ8校の計16校の児童(5・6年生)・生徒(1・2年生)を調査対象とした。調査時期は2010年1～2月である。質問紙の回収数は小学生1,016、中学生1,705、計2,721で、有効回答数は小学生1,014、中学生1,701、計2,715と

\*鳴門教育大学教職実践力高度化コース

\*\*熊本大学教育学部

\*\*\*大阪国際大学短期大学部

\*\*\*\*愛知県立大学大学院人間発達学研究所・博士後期課程

\*\*\*\*\*名古屋短期大学保育科

なった（表1：性別不明の回答は、表に含めていない）。調査は、各学校に質問紙を郵送し、実施を依頼する形で行った。回答票は児童・生徒それぞれがその場で封筒に入れて封をし、担当教師に手渡す方式をとった。

質問内容は、児童・生徒の所属や学校外活動に関するもの、自己肯定意識、学習意欲、規範意識、規範の行動的側面、ソーシャル・スキル、保護者や住民との触れ合い、学校外での体験活動について、全項目数は65である。なお、自己肯定意識については、教育社会学の見地から子どもの所属する集団や社会的背景に着目して示された池田（2000, 138-139頁）による自尊感情の構成要素と、心理学分野での使用頻度が高いローゼンバーグ（Rosenberg, M. 1965）の自尊感情尺度を参考にした。その際、自己肯定意識を4つの下位領域から構成されるものと仮定して対応する項目を作成した。学習意欲、規範意識、その行動的側面、ソーシャル・スキルに関しては、櫻井・松井編（2007）、吉田編（2001）、河村（2007, ?）、Comer, J.P. et al.（1996）を参考に項目を作成した。なお、分析には、SPSS Statistics 17.0を使用した。

表1 回答者の属性

	男子	女子	合計
小学5年	250	253	503
小学6年	251	258	509
中学1年	418	419	837
中学2年	445	402	847
合計	1,364	1,332	2,696

※不明が19あり、データ全体は2,715。

### 3. 児童・生徒の規範意識

#### 1) 規範意識の現状に関する全般的特徴

本研究では、児童・生徒の規範に関する意識（規範意識）としてルール遵守、公共心、対人関係、反社会的行動への意識などの13項目を設定した。回答は項目への同意の程度により、「そう思う」（1点）「少しそう思う」（2点）「あまり思わない」（3点）「全く思わない」（4点）の4件法とし、各回答を（ ）内の得点に換算したが、集計時に得点が高いほど規範意識が高くなるように、項目の意味により得点を逆転したものがある。

表2-1と表2-2は、小学校及び中学校の学年別・性別の4グループの平均値、標準偏差と一元配置分散分析を行った結果を示している。

小学生の回答の平均値を算出したところ、平均値が3.5以上のものが2)と3)の2項目、3.00~3.50までが7項目あり、一般的に論じられているような規範意識の低下は確認できなかった。ただし、13)「いじめられる人にも悪いところがある」の項目では、全体の平均が2.07と論理的中間値の2.50を下回っており、看過できない結果であった。また、6)「困っている人を助けたいと思う」、9)「地域のいろいろな活動に参加したいと思う」の各項目の平均値が約2.50であり、積極的な行動に関連する項目の値が相対的に低いことも考えるべきことであろう。

F検定の結果、各項目のグループ間で平均値に有意差がみられたのは5項目であるが、総じて学年差よりも男女差が作用していると考えられる。結果としては、男子に比べて女子の規範意識が高い。

中学生の回答の平均値を算出したところ、3.50以上は1項目のみであり、3.00~3.50までが4項目、2.50~3.00が5項目、論理的中間値の2.50以下が3項目みられたことから、小学生に比べて相対的に規範意識は低くなっている。小学生と同様に、13)「いじめられる人にも悪いところがある」の項目の平均値が2.10と相対的に低く、問題を残した。また、9)「地域のいろいろな活動に参加したいと思う」の平均値が2.34、10)「子どもが夜遅くまで出歩くことを私は許せない」の平均値が2.28と低い。野外活動には消極的である反面、夜間外出に対する抵抗感が薄れている結果となった。

F検定の結果、小学生と同様に有意差がみられた6項目及び全体的傾向として学年差よりも男女差がみられ、男子に比べて女子の規範意識が高い。しかし、13)いじめに関する項目については女子が低い結果となっており、慎重な検討が必要である。

#### 2) 規範意識に関する項目間の内的構成

規範意識の内的構成を探るために因子分析を試みた。方法は主因子法により、プロマックス回転を採用した。校種別にも因子分析を試みたが、類似の構造を示したので、小学校と中学校を併せて処理することとした。表3は、回転後の因子パターンと因子相関行列を示している。

表3から、第1因子に高い因子パターンを示した項目は、「困っている人を助けたいと思う」「無視されている友

表 2-1 学年別・性別の規範意識の平均値と一元配置分散分析の結果 (小学校)

質問項目 (*は、得点の逆転項目)	平均値				F 値	有意確率 ** < .01 * < .05
	5年男子	5年女子 ( )内は各標準偏差	6年男子	6年女子		
1) みんなで決めたことでも守らなくてもよい。	3.40 (.735)	3.50 (.670)	3.37 (.706)	3.56 (.617)	4.227	.006**
2) 子どもがたばこを吸うことを私は許せない。*	3.69 (.781)	3.68 (.753)	3.54 (.841)	3.66 (.770)	1.903	.127
3) みんなで使うところは大切に使うべきである。*	3.69 (.593)	3.73 (.505)	3.66 (.635)	3.78 (.529)	2.360	.070
4) 電車やバスの中で少々はしゃいでもかまわない。	3.28 (.818)	3.22 (.886)	3.28 (.781)	3.21 (.879)	.428	.733
5) 他人のことよりも自分のことが大切である。	2.51 (.915)	2.76 (.824)	2.69 (.868)	2.94 (.744)	11.127	.000**
6) 困っている人を助けたいと思う。*	3.37 (.740)	3.51 (.647)	3.36 (.715)	3.59 (.621)	6.796	.000**
7) 大人が決めたことでも守らなくてよい。	2.93 (.911)	2.97 (.813)	2.82 (.873)	2.82 (.831)	.455	.714
8) 世の中の悪いところを変えていきたいと思う。*	3.00 (.866)	2.94 (.872)	2.94 (.906)	2.88 (.861)	.993	.396
9) 地域のいろいろな活動に参加したいと思う。*	2.38 (1.006)	2.26 (.911)	2.36 (.942)	2.37 (.948)	1.136	.333
10) 子どもが夜遅くまで出歩くことを私は許せない。*	2.36 (1.049)	2.40 (.924)	2.14 (.922)	2.23 (.958)	3.328	.019*
11) 他の人が失敗してもゆるしてあげたい。*	3.23 (.787)	3.34 (.672)	3.18 (.789)	3.26 (.743)	1.525	.206
12) 無視されている友だちのことが心配になる。*	2.76 (.955)	3.07 (.833)	2.79 (.900)	3.08 (.805)	5.097	.002**
13) いじめられる人にも悪いところがあると思う。	2.10 (.965)	2.07 (.868)	2.19 (.867)	2.04 (.843)	1.868	.133

だちのことが心配になる」「他の人が失敗してもゆるしてあげたい」などの5項目であり、＜対人援助＞の因子と命名した。第2因子に高い因子パターンを示した項目は、「子どもがたばこを吸うことを私は許せない」「子どもが夜遅くまで出歩くことを私は許せない」などの3項目であり、＜積極的秩序維持＞の因子と命名した。第3因子に高い因子パターンを示した項目は、「大人が決めたことでも守らなくてよい」「みんなで決めたことでも守らなくてもよい」「電車やバスの中では少々はしゃいでもかまわない」などの4項目であり、＜ルール遵守＞の因子と命名した。因子間の相関は第1因子と第2因子は正の相関が、第1因子と第3因子及び第2因子と第3因子には負の相関がみられた。

因子の得点については、項目の因子パターンが.3以上であることを条件とし、因子を構成している項目の素点の合計を算出した。得点が高いほど規範意識が高くなるように項目により得点を逆転させている。信頼性係数( $\alpha$ )は若干低いですが、分析に支障はないと判断した。第1因子の合計得点は5点から20点まで分布し、平均点は15.19、第2因子は3点から12点まで分布し、平均点は9.56、第3因子は4点から16点まで分布し、平均点は12.17と3因子ともに論理的平均値をかなり上回っており、児童・生徒の規範意識はかなり高いという結果であった。

### 3) 規範意識に影響を及ぼしている要因

児童・生徒の規範意識の因子分析結果から得られた3つの因子に影響を及ぼしている要因を解明するために重回帰分析を行った。従属変数は＜対人援助＞＜積極的秩序維持＞＜ルール遵守＞の3つとし、独立変数はフェース・シートで設定した、校種、性別、部活動参加の有無、通塾の有無、習い事の有無、の5つの外生変数と、直

表2-2 学年別・性別の規範意識の平均値と一元配置分散分析の結果（中学校）

質問項目 （*は、得点の逆転項目）	平均値				F 値	有意確率 ** < .01 * < .05
	1年男子	1年女子 （ ）内は各標準偏差	2年男子	2年女子		
1) みんなで決めたことでも守らなくてもよい。	3.28 (.823)	3.39 (.662)	3.25 (.754)	3.32 (.723)	2.578	.052
2) 子どもがたばこを吸うことを私は許せない。*	3.32 (1.024)	3.36 (.937)	3.21 (1.056)	3.20 (1.010)	2.474	.060
3) みんなで使うところは大切に使うべきである。*	3.58 (.697)	3.64 (.611)	3.52 (.716)	3.56 (.686)	2.412	.065
4) 電車やバスの中で少々はしゃいでもかまわない。	3.01 (.959)	2.98 (.899)	2.91 (.926)	2.93 (.907)	1.140	.332
5) 他人のことよりも自分のことが大切である。	2.64 (.875)	2.81 (.801)	2.60 (.914)	2.80 (.806)	7.127	.000**
6) 困っている人を助けたいと思う。*	3.23 (.731)	3.37 (.657)	3.19 (.803)	3.36 (.682)	6.724	.000**
7) 大人が決めたことでも守らなくてよい。	2.93 (.911)	2.97 (.813)	2.82 (.873)	2.82 (.831)	3.421	.017 *
8) 世の中の悪いところを変えていきたいと思う。*	3.00 (.866)	2.94 (.872)	2.94 (.906)	2.88 (.861)	1.126	.337
9) 地域のいろいろな活動に参加したいと思う。*	2.38 (1.006)	2.26 (.911)	2.36 (.942)	2.37 (.948)	1.500	.213
10) 子どもが夜遅くまで出歩くことを私は許せない。*	2.36 (1.049)	2.40 (.924)	2.14 (.922)	2.23 (.958)	6.456	.000**
11) 他の人が失敗してもゆるしてあげたい。*	3.23 (.787)	3.34 (.672)	3.18 (.789)	3.26 (.743)	3.609	.013 *
12) 無視されている友だちのことが心配になる。*	2.76 (.955)	3.07 (.833)	2.79 (.900)	3.08 (.805)	15.986	.000**
13) いじめられる人にも悪いところがあると思う。	2.10 (.965)	2.07 (.868)	2.19 (.867)	2.04 (.843)	2.424	.064

接接触，間接接触，各種の体験度，の3つの内生変数である。変数の投入は一括投入法を用いた。

<対人援助>に対する8個の独立変数の説明力は表4のとおり，15.3%である。標準化係数（ $\beta$ ）で見ると，子どもが地域の大人と学校や地域社会で接触する頻度が大きいほど他者をいたわったり，他者の失敗に対して寛容になったりする傾向が明確である。学校で親や地域の大人をよく見かけるという直接的な接触ではなくとも，接触度の影響力は無視できない。性別では男子に比べて女子が，校種では中学校に比べて小学校が正の影響力をもっているといえる。各種の体験，部活動への参加の有無，通塾の有無，習い事の有無はほとんど影響を与えていないことも判明した。

<積極的秩序維持>に対する独立変数の説明力は，表5のとおり13.4%である。この<積極的秩序維持>の因子においても，最も影響力の大きい変数は地域社会の大人との学び，遊び，行事への取り組みといった直接的な接触であり，また間接的な接触も影響をもつ要因である。部活動への参加も5%水準で有意な影響を与えている。部活動においては一定の規制を甘受しなければならないし，部活動に参加することで自然と秩序を守り，あるいは他者との関係性を重要する姿勢が身につけていることも考えられる。しかし，この結果では子どもの体験度は負の影響を及ぼしている。さまざまな遊びや経験をすることが<積極的秩序維持>に対して負に作用している。この結果についての解釈は現時点では困難で，さらなる検討を要する。なお，校種では，中学校に比べると小学校が正の影響を受けているが，性別，通塾の有無，習い事の有無については有意な影響は見られなかった。

<ルール遵守>については，表6のとおり決定係数（ $R^2$ ）が.056と小さく，8つの独立変数の説明力は5.6%と若干低くなっている。標準化係数（ $\beta$ ）に注目すれば，校種の影響力が最も大きく，しかも負の係数であるの



表3 規範意識に関する因子分析結果

	F 1 ( $\alpha = .723$ )	F 2 ( $\alpha = .642$ )	F 3 ( $\alpha = .619$ )
6) 困っている人を助けたいと思う。	.681		
12) 無視されている友だちのことが心配になる。	.651		
11) 他の人が失敗してもゆるしてあげたい。	.536		
8) 世の中の悪いところを変えていきたいと思う。	.398	.354	
9) 地域のいろいろな活動に参加したいと思う。	.325	.299	
2) 子どもがたばこを吸うことを私は許せない。		.675	
10) 子どもが夜遅くまで出歩くことを私は許せない。		.650	
3) みんなで使うところは大切に使うべきである。	.296	.395	
7) 大人が決めたことでも守らなくてよい。		-.238	.625
1) みんなで決めたことでも守らなくてもよい。			.543
4) 電車やバスの中で少々はしゃいでもかまわない。			.494
5) 他人のことよりも自分のことが大切である。	-.270	.292	.398
13) いじめられる人にも悪いところがあると思う。			.223

因子相関行列：  
 F 1    F 2  
 F 2    .560  
 F 3    -.508    -.514

表4 <対人援助>に対する重回帰分析の結果

	R = .391	R <sup>2</sup> = .153	F = 57.527	p = .000
	標準化係数 ( $\beta$ )	t 値	有意確率	
(定数)		28.435	.000	
校種	-.075	-3.409	.001	
性別	.087	4.539	.000	
部活動	-.006	-.290	.772	
通塾	-.001	-.056	.955	
習い事	-.022	-1.072	.284	
直接接触	.263	12.535	.000	
間接接触	.146	7.244	.000	
体験度	-.015	-.745	.456	

表5 <積極的秩序維持>に対する重回帰分析の結果

	R = .367	R <sup>2</sup> = .134	F = 49.938	p = .000
	標準化係数 ( $\beta$ )	t 値	有意確率	
(定数)		25.055	.000	
校種	-.094	-8.684	.000	
性別	.008	.420	.674	
部活動	-.049	-2.507	.012	
通塾	-.003	-.177	.859	
習い事	-.032	-1.574	.116	
直接接触	.205	9.700	.000	
間接接触	.060	2.950	.003	
体験度	-.171	-8.600	.000	

で小学校に比べると中学校において、ルールに対してより遵守しなくてもよいとしていることを意味する。ただし、この結果については単に自己中心的になっていると解釈すべきか、自己主張が強まる「成長過程」の結果と考えるか、はこれだけでは判断できない。また直接・間接接触が大きければ自己中心的ではなくなることも判明した。次に、これも解釈は困難ではあるが、さまざまな体験をしている児童・生徒ほどルールを遵守しない傾向にあるという結果であった。性別では、5%水準で優位な影響を受けている。 $\beta$ がプラスであることから、男子に比べると女子がよりルールを遵守しているということになる。なお、部活動への参加の有無、通塾の有無、習い事の有無は優位な影響を及ぼしていないという結果であった。

表6 &lt;ルール遵守&gt;に対する重回帰分析の結果

R = .236	R <sup>2</sup> = .056	F = 18.933	p = .000
	標準化係数 (β)	t 値	有意確率
(定数)		30.722	.000
校種	-.136	-5.900	.000
性別	.051	2.526	.012
部活動	-.000	-.034	.973
通塾	-.016	-.804	.421
習い事	.016	.745	.456
直接接触	.096	4.329	.000
間接接触	.068	3.177	.002
体験度	-.106	-5.092	.000

#### 4. 児童・生徒の規範行動

##### 1) 規範行動の現状に関する全般的特徴

本研究では児童・生徒の規範に関する意識とともに、社会的な規範性を問われる行動（規範行動）について、その頻度を尋ねた。質問紙の設問は、社会的に望ましいとみなされる行動と望ましくないとみなされる行動の両方を合わせて7項目とした。回答は「よくある」（1点）「少しある」（2点）「まったくない」（3点）の3件法により各項目（行動）の頻度を尋ね、得点化した。集計時に、得点が高いほど社会的な望ましさが高くなるように、項目により得点を逆転したものがある。

表7-1と表7-2は、小学校及び中学校の学年別・性別の4グループの平均値、標準偏差と一元配置分散分析を行った結果を示している。

表7-1 学年別・性別の規範行動の平均値と一元配置分散分析の結果（小学校）

質問項目 （*は、得点の逆転項目）	平均値				F 値	有意確率 ** < .01 * < .05
	5年男子	5年女	6年男子	6年女子		
1) 友だちの仕事を手伝ったことがある。*	2.31 (.566)	2.41 (.531)	2.36 (.537)	2.55 (.507)	8.985	.000**
2) いじめを見ても知らないふりをしたことがある。	2.26 (.586)	2.39 (.549)	2.15 (.588)	2.27 (.569)	7.104	.000**
3) 友だちと自転車の二人乗りをしたことがある。	2.14 (.792)	2.19 (.735)	2.08 (.796)	2.03 (.797)	2.004	.112
4) みんなで使うところに落書きをしたことがある。	2.65 (.578)	2.68 (.530)	2.66 (.582)	2.70 (.545)	.459	.711
5) 友だちと他の人の悪口を言ったことがある。	1.81 (.616)	1.85 (.589)	1.77 (.544)	1.70 (.560)	2.993	.030*
6) 困っている人を助けたことがある。*	2.22 (.602)	2.36 (.550)	2.29 (.619)	2.41 (.574)	5.445	.001**
7) 信号無視をしたことがある。	2.18 (.728)	2.40 (.650)	2.09 (.749)	2.22 (.756)	7.974	.000**

小学校の結果については、7項目の中で数値の最も高い項目は4)「みんなで使うところに落書きをしたことがある」であり、次いで1)「友だちの仕事を手伝ったことがある」6)「困っている人を助けたことがある」2)「いじめを見ても知らないふりをしたことがある」の3項目の数値が比較的高い。一方、7)「信号無視をしたことがある」3)「友だちと自転車の二人乗りをしたことがある」の2項目は4グループとも論理的中間値である2.00より高いものの、数値が比較的低く、最も低い項目である5)「友だちと他の人の悪口を言ったことがある」では4グループとも2.00より低く、したがって行動として頻繁になされていることがわかる。

小学生について、4グループ間の平均値に有意確率1%未満で有意差があるのは、1)「友だちの仕事を手伝

ったことがある」2)「いじめを見ても知らないふりをしたことがある」6)「困っている人を助けたことがある」7)「信号無視をしたことがある」の4項目、有意確率5%未満では5)「友だちと他の人の悪口を言ったことがある」の1項目である。

1)「友だちの仕事を手伝ったことがある」2)「いじめを見ても知らないふりをしたことがある」6)「困っている人を助けたことがある」7)「信号無視をしたことがある」の4項目については、いずれも5年・6年ともに女子の数値が高い。このうち、1)「友だちの仕事を手伝ったことがある」6)「困っている人を助けたことがある」の2項目は、性別ごとに学年が上がると数値が高くなり、人を援助する行動は学年が上がるとより積極的に行っている。また、2)「いじめを見ても知らないふりをしたことがある」7)「信号無視をしたことがある」の2項目は、性別ごとに学年が上がると数値が低くなっている。

5)「友だちと他の人の悪口を言ったことがある」は、6年の数値が5年よりも低くなっており、5年では女子がやや高いが、6年では男子がやや高く、女子が大きく低下している。

表7-2 学年別・性別の規範行動の平均値と一元配置分散分析の結果(中学校)

質問項目 (*は、得点の逆転項目)	平均値				F 値	有意確率 ** < .01 * < .05
	1年男子	1年女子	1年男子	1年女子		
1) 友だちの仕事を手伝ったことがある。*	2.33 (.541)	2.33 (.516)	2.32 (.572)	2.38 (.557)	.914	.434
2) いじめを見ても知らないふりをしたことがある。	2.01 (.587)	2.00 (.542)	2.02 (.624)	2.00 (.569)	.198	.898
3) 友だちと自転車の二人乗りをしたことがある。	1.95 (.817)	1.95 (.770)	2.05 (.817)	1.89 (.782)	3.132	.025 *
4) みんなで使うところに落書きをしたことがある。	2.37 (.732)	2.32 (.729)	2.41 (.694)	2.28 (.776)	2.362	.070
5) 友だちと他の人の悪口を言ったことがある。	1.73 (.600)	1.65 (.538)	1.76 (.612)	1.63 (.565)	4.657	.003**
6) 困っている人を助けたことがある。*	2.24 (.618)	2.24 (.589)	2.20 (.599)	2.26 (.609)	.650	.583
7) 信号無視をしたことがある。	1.89 (.779)	2.03 (.750)	1.84 (.766)	1.93 (.800)	4.727	.003**

中学校では、4グループ間の平均値に有意確率1%未満で有意差がある項目は7項目中、5)「友だちと他の人の悪口を言ったことがある」7)「信号無視をしたことがある」の2項目、また有意確率5%未満で有意差があるのは3)「友だちと自転車の二人乗りをしたことがある」の1項目である。

5)「友だちと他の人の悪口を言ったことがある」は、学年間では差は見られないが、1年・2年ともに女子の数値が男子より低く、女子のほうがより頻繁に行っている。一方、7)「信号無視をしたことがある」は、1年・2年ともに男子の数値が女子より低く、性別ごとに学年が上がると数値がやや低くなり、頻度がやや上がっている。3)「友だちと自転車の二人乗りをしたことがある」は、1年では性別で差は見られないが、2年では男子は高くなり、女子は低くなっており、性別の差が広がっている。

7項目全体について、得点の最も高い項目が4)「みんなで使うところに落書きをしたことがある」であること、最も低い項目が5)「友だちと他の人の悪口を言ったことがある」であること、また後者の数値が2.00より低いこと、以上3つの点は小学校と同じ結果である。ただし、中学校では、7)「信号無視をしたことがある」3)「友だちと自転車の二人乗りをしたことがある」の2項目も全体として2.00より低く、また2)「いじめを見ても知らないふりをしたことがある」も2.00近くにまで低下しており、社会的に望ましくないと思なされる行動について、その頻度が小学生と比較して増加していることがわかる。一方、1)「友だちの仕事を手伝ったことがある」6)「困っている人を助けたことがある」の2項目は、小学校と比較して女子の数値がやや低下したことで、グループ間の有意差がなくなっている。

## 2) 規範行動に関する項目間の内的構成

規範に関する行動の項目間の関連を探索するために因子分析を行った。項目数は限られているが、調査した7項目について主因子法を用い、回転はプロマックス法を採用した。校種別にも分析を試みたが、因子の構造に違いは見られなかったため、小学校と中学校のデータを一括して扱った。結果は表8に示したとおり、2因子が抽出された。

第1因子は、「信号無視をしたことがある」「友だちと自転車の二人乗りをしたことがある」「みんなで使うところに落書きをしたことがある」「友だちと他の人の悪口を言ったことがある」「いじめを見ても知らないふりをしたことがある」の5項目で構成され、いずれも社会的規範の遵守が問題となる行動に関わるものであることから、＜規範遵守行動＞の因子と命名した。第2因子は、「友だちの仕事を手伝ったことがある」と「困っている人を助けたことがある」の2項目で構成され、いずれも対人的な支援行動に関わるものであることから、＜対人援助行動＞の因子と命名した。2因子間の相関は低く、独立性は高い。

表8 規範行動に関する因子分析結果

	F 1 ( $\alpha = .703$ )	F 2 ( $\alpha = .584$ )
7) 信号無視をしたことがある。	.732	
3) 友だちと自転車の二人乗りをしたことがある。	.671	
4) みんなで使うところに落書きをしたことがある。	.610	
5) 友だちと他の人の悪口を言ったことがある。	.536	
2) いじめを見ても知らないふりをしたことがある。	.304	
1) 友だちの仕事を手伝ったことがある。		.647
6) 困っている人を助けたことがある。		.642

因子相関行列：  $-.097$

次に因子の得点については、項目の因子パターンが、3以上であることを条件とし、因子を構成している項目の素点の合計を算出した。素点については、得点が高いほど社会的に望ましい行動の頻度が高くなるように、項目により得点を逆転させている。信頼性係数( $\alpha$ )は第2因子でいくらか低いが、分析に支障はないと判断された。第1因子の合計得点は5点から15点まで分布し、平均点は10.35であった。また、第2因子の合計得点は2点から6点まで分布し、平均点は4.63であった。2つの因子のいずれについても論理的平均値をやや上回っていることから、児童・生徒の規範を遵守する行動の頻度も、対人援助行動の頻度もやや高いという結果であった。

## 3) 規範行動に影響を及ぼしている要因

児童・生徒の規範に関する行動の因子分析結果から得られた2つの因子に影響を及ぼしている要因を解明するために重回帰分析を行った。従属変数は＜規範遵守行動＞＜対人援助行動＞の2つとし、独立変数はフェース・シートで設定した校種、性別、部活動参加の有無、通塾の有無、習い事、の有無の5つの外生変数、そして直接接触、間接接触、各種の体験度、の3つの内生変数である。変数の投入は一括投入法を用いた。

表9 &lt;規範遵守行動&gt;に対する重回帰分析の結果

	R = .366	R <sup>2</sup> = .134	F = 49.648	p = .000
	標準化係数 ( $\beta$ )	t 値	有意確率	
(定数)		47.125	.000	
校種	-.205	-9.270	.000	
性別	-.051	-2.637	.008	
部活動	.006	.295	.768	
通塾	-.003	-.152	.879	
習い事	.037	1.845	.065	
直接接触	.162	7.671	.000	
間接接触	-.054	-2.659	.008	
体験度	-.271	-13.624	.000	



＜規範遵守行動＞に対する重回帰分析の結果を表9に示した。8つの独立変数の＜規範遵守行動＞に対する説明力は13.4%である。体験度がもっとも大きな負の影響力をもち、次いで校種が負の影響力を、地域の大人との直接的な接触が正の影響力をもっている。また、影響力としてはやや小さいが、地域の大人との間接的な接触と性別は負の影響力を、習い事の有無は正の影響力をもっている。したがって、校種では中学生であることが、性別では女子であることが、マイナスに作用することが示された。この結果からは、多様な体験をするほど規範を遵守しなくなるという解釈ができるが、子どもたちの生活における体験の特徴を検討する必要がある。一方で地域の大人との直接的な接触など、対人関係を広げる体験は規範を遵守する行動にプラスに作用している。なお、部活動への参加の有無、通塾の有無はほとんど影響を与えていないことが示された。

表10 ＜対人援助行動＞に対する重回帰分析の結果

	R = .380	R <sup>2</sup> = .144	F = 54.455	p = .000
	標準化係数 (β)			
(定数)		t 値	有意確率	
校種	.014	.618	.536	
性別	.124	6.485	.000	
部活動	-.023	-1.189	.234	
通塾	-.007	-.359	.720	
習い事	-.013	-.628	.530	
直接接触	.135	6.422	.000	
間接接触	.205	10.147	.000	
体験度	.176	8.920	.000	

＜対人援助行動＞に対する重回帰分析の結果を表10に示した。8つの独立変数の＜対人援助行動＞に対する説明力は14.4%である。＜対人援助行動＞に関しては、地域の大人との間接的な接触がもっとも大きな正の影響力をもち、次いで体験度、地域の大人との直接的な接触と性別がいずれも正の影響力をもっている。また、校種、部活動への参加の有無、通塾の有無、習い事の有無は有意な影響力をもっていないことが示された。地域の大人との間接的な接触とは学校で地域の大人や親などを見かけたことがあるといった対人的な認知であり、人のことに興味をもったり状況を考えたりする意識と行動に関連していると考えられる。なお、多様な体験もプラスに作用しており、先にみた規範遵守行動ではマイナスに作用していたのと対比して、対人援助行動には逆の作用を及ぼす活動としての特徴をもっていると考えられる。

## 5. 考 察

まず、規範意識に関する検討結果から、全体として、一般的にいわれている子どもの規範意識の低下は見られなかった点を指摘できる。ただし項目別にみると、いじめられる人にも悪いところがあるとする認識が少なくなると、看過できない結果となっている。なお、全体的な特徴として、性別に関して女子が男子より規範意識が高いという結果が示された。こうした規範意識に影響を及ぼす要因として強く作用しているものが、学校段階および学校と地域の連携の程度であった。また、規範意識の中でも積極的秩序維持やルール遵守に対しては、地域住民との直接的・間接的接触が強い影響を及ぼしており、学校と地域の連携を図ることが子どもの規範意識を高める手だてになると考えられる。一方、規範意識にほとんど影響を与えていないものは、通塾の有無と習い事の有無であった。以上のことから、他者とのかかわりを深めるような活動や体験が子どもの規範意識の形成には必要であるといえる。ただし、子どもの各種の体験は相対的には規範意識に対してマイナスの影響を与えていることが示されているので、この結果の分析については今後の課題として残されている。

次に、規範行動に関する検討結果から、最も頻繁になされている行動は「他の人の悪口を言ったことがある」であり、最もなされていなかったのは「落書き」であった。また、友だちの仕事を手伝ったり、困っている人を助けたりするといった他者への援助行動が、小学校段階では上位にあがっていった。しかし、中学校段階になるとその数値が一部下がっている。このように、対人援助行動は中学校において小学校とほとんど変わらないか減っているという結果が示されたことから、中学校段階では他者への援助行動に何らかの歯止めがかかっていると考えられる。それらと比較して、いじめを見ても知らないふりをしたり、他の人の悪口を言ったりするという社会的に望ましくないといみなされる行為は増えており、中学生という年齢あるいは中学校生活には規範的行為を

難しくさせている状況もあると考えられる。こうした規範行動に影響を与える要因として、中でも規範遵守行動については体験度が最も大きく、規範意識の結果と同様であった。対人援助行動については、地域の大人を学校でよく見かけたりするという間接的な接触機会が大きく影響をしており、地域の大人の姿をモデルとする場合も多いと考えられる。一方、規範行動に影響を及ぼしていなかったのが、部活動への参加と通塾の有無であった。

以上、児童・生徒の規範意識と規範行動の結果に共通するのは、学校と地域との連携の程度が子どもの意識や行動にプラスの影響を及ぼすこと、および通塾や習い事の有無はそれらにほとんど影響を及ぼさない点であった。今後、子どもの内面に関する事項間の関連、本研究では取り上げなかった学習意欲やソーシャル・スキル等、その他の要因との関連についてのさらなる分析・検討が課題である。

#### 付記

本調査にご協力いただきました児童・生徒の皆様、お世話いただきました諸先生方に心よりお礼申し上げます。なお、本研究は科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号：19630703による研究成果の一部である。

#### 文 献

Comer, J.P. and others., *Rallying the Whole village*, Teachers College Press, 1996. (本書で使用されている質問紙である、SCHOOL CLIMATE SURVEY Elementary and Middle School Version を参考にした。)

池田寛『学力と自己概念』解放出版社 2000年

柏木智子「学校と地域の連携における子どもの主体形成」日本教育制度学会『教育制度学研究』第13号 2006年, 122-135頁

河村茂雄『データが語る②子どもの実態 学習意欲・友だち関係・規範意識を徹底検証』図書文化 2007年

河村茂雄「学級集団アセスメント hyper-QU 小学校4～6年用」「学級集団アセスメント hyper-QU 中学校用」図書文化 [発行年不明]

中谷素之『学ぶ意欲を育てる人間関係づくり 動機づけの教育心理学』金子書房 2007年

Rosenberg, M. *Society and the adolescent self-image*, Princeton University Press, 1965. (なお、翻訳にあたり、山本真理子・松井豊・山成由紀子「認知された自己の諸側面」『教育心理学研究』30号 1982年, 64-68頁を参考にした。)

櫻井茂男・松井豊編『心理測定尺度集Ⅳ－子どもの発達を支える＜対人関係・適応＞』サイエンス社 2007年

吉田富二雄編『心理測定尺度集Ⅱ－人間と社会のつながりをとらえる＜対人関係・価値観＞』サイエンス社 2001年

# Research on Normative Consciousness and Normative Behavior of Children

— Perceived to the School and Community Relationship as the Factor that Exert the Influence on Those —

SHIBAYAMA Akiyoshi<sup>\*</sup>, IWANAGA Sadamu<sup>\*\*</sup>, KASHIWAGI Tomoko<sup>\*\*\*</sup>,  
FUJIOKA Yasuko<sup>\*\*\*\*</sup> and HASHIMOTO Yoji<sup>\*\*\*\*\*</sup>

The purpose of this research is to present the actual conditions of normative consciousness and normative behavior of children, and to announce with the factors that exert the influence on those. We carried out the questionnaire survey to the students of elementary schools and junior high schools that establish or not establish school council of each 8 school.

About normative consciousness, the decline of that of children was not seen as a whole. Girls are more normative than boys, and elementary school children are than junior high school students.

The school stage and also degree of the school and community partnership are as the major factors that exerts the influence on normative consciousness.

About normative behavior, besides the helping behavior to the person was more frequent with elementary school children. However, there is the part that is dropping in the junior high school students.

The experience degree of the school and community relationship activity that is the main issue about rule keeping behavior, is the factor that exerts the influence on normative behavior, similar as the result of normative consciousness.

---

<sup>\*</sup>Course of Advanced Educational Practitioner, Naruto University of Education

<sup>\*\*</sup>Faculty of Education, Kumamoto University

<sup>\*\*\*</sup>Osaka International College

<sup>\*\*\*\*</sup>Graduate School of Human Development, Aichi Prefectural University

<sup>\*\*\*\*\*</sup>Department of Early Childhood Care and Education, Nagoya College